

第3表 第2表と同じ(ただし梅雨期間)
(統計期間1890~1959)

月 旬	6			7	
	上	中	下	上	中
≥0.1mm	11(4.3)	18(4.4)	21(5.6)	18(5.8)	17(3.9)
≥10mm	33(1.5)	41(1.9)	45(2.6)	38(2.7)	38(1.8)
≥30mm	51(0.5)	71(0.8)	71(1.3)	59(1.3)	52(0.9)

も多いことはもちろんであるが、とくに日量10~20mm また30~50mmの雨が他の季節よりも多いということになる。第3表は梅風期間を旬別に分けた表であるが、これによると、30mmの雨に着目すると6月中、下旬は同じ平均量で降るがその回数は6月下旬の方が多く、7月上旬は6月下旬と同数ぐらい降るが、その平均雨量はやや少ない、というようなことがうかがわれよう。

7. 結 び

以上ここでは一般部外者の要求に応じられることだけを目標にしたので日量50mm,あるいは、100mm以上

の雨についての統計は何も示していない。これらの数は多いがしかしバックを持たない人々のための資料を整えておくことも無駄ではないと思っている。

参 考 文 献

- 1) 岡田武松 (1951): 雨 岩波 pp. 351
- 2) 矢津昌永 (1913): 大日本地文学気界講話 丸善 pp. 353
- 3) 高橋浩一郎 (1955): 動気候学 岩波 pp. 316
- 4) 上城一市, 江田季敏 (1957): 鹿児島島の梅雨, 研究時報 9 p. 607~608.
- 5) 栗林直里 (1957): 名瀬における梅雨について 研究時報 9 p. 605~606.
- 6) 佐賀地方気象台 (1960): 佐賀県気象便覧 pp. 35
- 7) 福岡管区気象台 (1957): 九州地方気候表(広報および予報用) pp. 329
- 8) 田島節夫 (1945): 中緯度高気圧の動静と季節予想, 東北長期予報研究会報 5年7号.
- 9) 大谷東平: 梅雨の長年変化について, 気象集誌 2nd Ser., 11, 501~504.

理 事 会 便 り

第11期 理事会議事録

日 時 昭和35年12月12日 17.30~19.00

場 所 仙楽園

出席者 常任理事10名(正野, 島山, 和達, 岸保, 松本 吉武, 桜庭, 根本, 有住, 淵)

地方理事6名(山岡, 大谷, 倉石, 藤田, 堀内 西本)

監 事1名(増田) (いずれも順序不同)

定款第27条により常任理事(13名)および、地方理事(7名)の過半数が出席して理事会が成立することを確認し、正野理事長が議長席につき、次のような報告と議題について熱心な討論ののち右のような決議が行なわれた。

議題および決議

1. 定款改正に関する件

正野理事長から定款改正の主旨、桜庭理事から定款改正委員会の検討結果の説明があった。

これに対し種々討論が行なわれ、結局来年度の定期総会には提出せず、いろいろの点で利害得失があり、なお慎重に検討を続けることとなった。

2. 来年度春季大会および総会について山岡理事から説明の後來年度春季大会および総会の会期について種々検討の結果、昭和36年5月29日、30日、31日の3日間北大において開催されることとなった。

なお、シンポジウム等の内容については北海道支部の要望に基き後日決定されることとなった。